

T W I N

Arch

ツインアーチ



TOP INTERVIEW

わが秘なる東京

西村國彦 弁護士

出久根達郎

東京ゆかりの「人生」経営人

美術館の歩き方 布施英利

孤読の旅路

中学生たちよ!

やっぱり居酒屋

シネマ
銀幕の灯

茶屋二郎

青淵の竜 [小説 渋沢栄一]

東京商工会議所
今月のご利用案内

中小企業のMSA成功事例

研修センター
春講座のご案内

西村國彦(にしむら・くにひこ) 弁護士。1947年東京都生まれ。東京大学卒。大学までは卓球一筋。現在はゴルフにぞっこん(因みに現在HC3)。濃厚なジェントルマンが似合う勝負師に化身するのは法廷とゴルフ場。さらにその二つが合体し、混沌のゴルフ会員権問題やハゲタカ舞い降りるゴルフ場の法的再建問題の解決に挑む弁護士の魂矢。ゴルファーの立場からゴルフ場の再生に取り組み。またゴルフジャーナリストとしても各誌に執筆を揮う。現在さくら共同法律事務所シニアパートナー。著書に「21世紀に向けたゴルフ場再生への提言」「賢いゴルフ場 賢いゴルファーのための法戦略」「平成ゴルファーの事件簿」などがある。2005年には日本ゴルフ学会賞を受賞した。

新宿区霞ヶ丘町 国立霞ヶ丘競技場体育館

ゴルフ会員のプレー権が守られるということは10年前までは決して自明のことではなかったんです。会員権は会社更生法や民事再生法においては清算されるかもしれない対象だったんです。お金でチャラにできる対象であるというのが一般の法律家の考え方だったんです。でもそれに従えば司法界が社会的混乱を助長することになる。だから私は形式的な法律ではなく社会正義に依拠してしつこく訴え続けて、なんとかプレー権を死守したんです。

撮影/内藤利朗



懐かしいですね。中学二年の時のことです。四十五年位前のことですね。中もその時のままです。ここで都内の中学校の卓球大会があったんですが、ぼくは二回戦で負けました。相手は三年で優勝候補、ぼくは二年でノーシード。十七対十七位まではいくんですが、最後はやはり自力の差。悔しくてね。その人はそのあと本当に優勝しちゃうんです。よほど刺激されたのか、負けず嫌いなのか、ぼくは翌年都内の私立学校大会で個人も団体も総なめ、リベンジを果たしました(笑)。その後ゴルフも、あるいはゴルフ場がらみの闘争もそうですが、始めたところ、どうもこの辺に起源があるような気がしますね。こじつけかなあ(笑)。妹の息子が卓球をやっていた、最近同じ大会に出たらしくて、パンフレットに昭和三十六年かな、その年の優勝者としてぼくの名前が出てたと言っていました(笑)。二年の時に負けたその相手とは大学に入ってベアを組むようになりました。そうすると関東では少しは名が売れていたこともあって、いや変則な卓球をやったてせいか(笑)、どう見てもレ

胸奥にあり続けたささやかなぬ話を聞く「わが秘なる東京」の今号のゲストは弁護士西村國彦さんです。日本では不動産や株式が八〇年代半ばから大暴騰し、その後九〇年代に入り大暴落が始まり「失われた十年」などと呼ばれる長期不況にみまわれました。同時期ゴルフ会員権をめぐっても仕切られた悲喜劇がありました。紙切れと化したゴルフ会員権からはそれまで表面化しなかった問題が噴出し、まさに「無政府状態」となり、この問題解決への孤独な挑戦が始まりました。苦闘十余年。今ではその世界においては西村さんを知らぬ人はいません。今回お会いしたのは国立競技場の中にある体育館。中学生の時卓球の試合があったというこの体育館には、どうやらタフなゴルファー弁護士西村のルーツがありそうです。

鍛えられた欲望



ベルが上な大学のベアが負けてくれたりすることもありましたね(笑)。さて近年のゴルフ場の問題を考えると、ゴルフ会員権の価格の暴騰暴落のあと、狙いすましたようにゴルフ場に国内外の大手資本が入ってきました。我々はその時初めて、ゴルフ会員は会員権についてあまりに不勉強だったということ、そしてゴルフ場経営者はゴルフ場経営者で他人の権力で相撲を取ってきたということ、そのうえ銀行は不勉強でありかつ無責任であったことが露呈し、ゴルフ場に関わるすべてのことが非常にいいかげんになされてきたことを知ったのです。

ゴルフ場を錬金の場と目論む輩との戦いは、現在いくつ小々な噴火を残すにしても、概ね大きな山は越え、外資は仕上げの段階に入っています。ぼる儲けの丸儲けですよ。死に体のゴルフ場を安く買って、合理化再生して、上場することで儲けるんです。村上ファンドの数倍の規模で動いているファンドですか、会員たちにとってはミサイルに竹槍で立ち向かうようなものですよ。飛んで来るミサイルから、法的に弱い立場にあるゴルフ会員を如何に守るか。まずは会員のプレーする権利を確保することを最優先させようと考えました。幸い知恵を絞って結束することでプレー権は守ることができました。しかし相手さんはすぐには与えよう、しかし何千億、何兆円という預託金はカットしろとくるんです。そこで大資本はぼる儲けできるんです。かわいそうな会員はプレー権と将来少しは値上がりするかもしれない百分の一の価格になった会員権という始末を与えられて、戦いは幕を閉じるんです。プレー権確保のあとの次の戦いをしなくては行けないのですが、弱き会員たちは振り回され、もうそれでいいや、となっちゃうんです。私自身も次の明確な一手を打てなかったことに世帯たる思いを持っています。

外資、大資本も金をごっそり取ってすぐ飛び立つのもまずいというので、日本のゴルフ場をサービス業として運営し、実はそこでまた儲けているというのが実情なんです(笑)。日本全体が素人集団なんです。ヨーロッパにしろ華僑やアラブにしろ、領土争いや戦争の中で生き抜いてきた民族というのは自分たちの財産を守るノウハウを持っています。日本というのはぬるま湯なんです。アメリカに占領された時も媚を売ってしのいで来たし、ジョン・ダワーの「敗北を抱きしめて」でもないですが、日本は第二次大戦の総括をきちんとしていないし、先のバブルの総括だってやっていないでしょう。自ずと日本はピーター・タスカの描いた「ハゲタカの罅」と成り果てています。海外の投資ファンドは戦争などを経験して得た「鍛えられた欲望」とでもいうべき儲ける術を知っていますよね。私の戦いなど日本のゴルフ場を舞台にしてちよいちよいと戦火を交えたところがあるにせいでしょ(笑)。最終的にはこちらの用意した仕掛けをうまくよけて、あるいは逆手にとって敵さんが逆転勝利したといったところでしょうか。ちよつと悔しいけど(笑)。

西村さんが、山梨県にある東相模ゴルフクラブ(現上野原カントリークラブ)における経営危機を二千人の会員と一致団結し、プレー権を確保し、さらに銀行でもなく外資でもなく会員主導で見事に再生させたり「ダーシップは今も語り草です。西村さんにその話を聞けると、いやあ、あれは会員の皆さんが本心に強い意志と情熱を持っておられたからですよ、と慎み深いご返答。平時はあくまでジェントルマンです。